

茶の湯文化学会会報 No.62

第62号 / 2009年10月1日 千606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL. 075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 -0805 生産開発科学研究所内 FAX. 075-702-9314
http://www.chanoyu-gakkai.jp e-mail chanoyu@regano.ocn.ne.jp

川上不自二百年遠忌における新たな発見

川上紹雪

平成十八年、川上不自は二百年の遠忌の年を迎え、これを機に二年間にわたって、江戸千家ではいくつかの記念行事を催行しました。

記念の献茶式および御茶会については、平成十八年十月祥月命日の菩提寺・安立寺における御遠忌大法要を皮切りに、同年十一月京都大徳寺本坊における供茶式と奉讃茶会、翌年六月の神田明神における献茶式と記念茶会、同年十月東京美術倶楽部における慶讃報恩茶会、同年十二月紀州新宮における報告供茶式と記念茶会といった具合に、不自と深い縁のある場所を巡りました。またそれと並行して、孤峰不自居士寿像と木彫像、かつて不自が所持した利休居士像の修復を行い、さらには平成十九年十月には没後二百年記念の特別展覧会を東京・両国の江戸東京博物館で開催し、いくつかの記念講演会も実施いたしました。

川上不自の名は、今でこそ皆様にとっても聞き覚えのあるものとなりましたが、それは不自存命中以来常にそうあり続けた訳ではありませんでした。少なくとも今から半世紀程前には、一般的には必ずしも広く認識されていたと言える状況ではなかったようです。その状況を一変させたのは、この度の展覧会からちよ

うど四十年前の昭和四十二年（一九六七）一月に池袋・西武百貨店で開催した「生誕二百五十年記念 川上不自展」でありました。総出品数四百点を超える川上不自を包括的に捉えた大きな展覧会であり、この展覧会によって川上不自という茶人が茶道会に改めて広く再認識されたと言っても過言ではないでしょう。

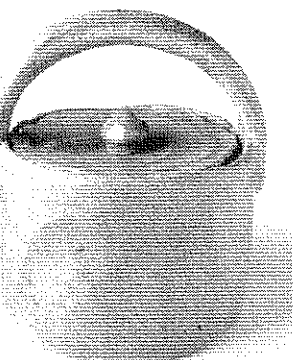
一般に、展覧会などの開催によって新たな発見があったり、その認識が改められたりすることがあると聞きますが、昭和四十二年の「不自展」ではまさに不自に対する認識が改められ、そしてまた今回の一連の行事を通じていくつかの新たな発見や再認識がありました。拙稿ではそのいくつかを皆様にご笑覧いただき、雑駁な話の中から江戸の茶の湯を再考していただく端緒としていただければ幸いと愚考するものです。

前置きが長くなりましたが、この度の一連の行事の中で新たな発見として最も心躍らされたことは「冬瓜」銘の水指が見つかったことであろうかと思えます。

『不自筆記』の中に次のような記述が見られます。

不自の師、如心斎が七事式の一・二三の札の打ち方についての工夫を内弟子一同に問うたが答えられる者が

いなかった。しかし不白はその工夫がつき、なおかつその答えは如心斎の考えと寸分違わぬものであった。そのとき如心斎は、手にしていた扇子を放り投げて「奇妙なり」と言っ



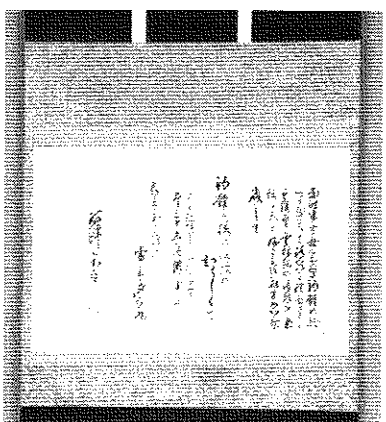
【写真1 宗旦好赤樂手付水指銘「冬瓜」長入造】

て人払いをし、その事の伝授をし、その場に有った樂の手付きの水指に冬瓜という銘をつけて授けて下さったという。

また、同じく『不白筆記』の中に書かれた次のような逸話に繋がる掛物が新たに発見されたのも興味深いことでした。

物事がよく似ている様を、瓜を二つに割った断面が同じあることから瓜二つといいますが、同様に師弟が同じ見解に達したので、如心斎がその証として「冬瓜」という銘を付けて授けて下さったと言うことです。

不白と塗師宗哲とが連れ立って如心斎の名代として膳所へ茶に行く途上、大きな壊れた釣鐘が芝の上に打ち捨てられて青錆びているのを見つける。それを見て「この鐘を大露地へ捨て置いたら面白からう」といった宗哲の物凄く感覚に不白は舌を巻き、不審菴に帰ってから如心斎に名代としての報告をすると同時にこのこともまた包み隠さずお話しした。そして、以前に不白が雲林院の茶室の露地の依頼を受けており、そこには幸い桜の林があるので全て桜にしようと思うと如心斎にお話したことがあったが、如心斎はその大鐘と桜の



【写真2 不白筆 掛物釣鐘の逸話】

不白像と不白所持利休像の修復の場からもいくつかの発見がありました。

例えば、この両者は共に古い時代の修復がなされていたが、その折に施された些か厚い塗膜の下には、各々の装束に胡粉を盛った龍の紋と、金の唐草紋とが隠されていました。

た。修復を手掛けて頂いた東京藝術大学・藪

内佐斗司教授からは、古い時代に華美な装飾を隠さなければならなかった事情の有無についての御指摘をいただき今後の課題となった次第です。

また、岐阜大学・森田晃一教授の研究による、不白を取り巻く人脈についての考察は、遠忌を過ぎたいま佳境を迎えています。愚

生は詳しく論じる立場にはありませんが、一つには江戸における経緯に広大な紀州人脈における紀州人・不白の位置とその広がりの問題。さらには不白門下の蒔田星橋（松平不味実弟）を介しての松平不味、酒井宗雅との交流の実態解明も今後の課題となりました。

熊本大学・岩崎竹彦准教授の、不白の郷里である紀州新宮における川上家とその周辺についての研究も進んでいます。

愚生は平成八年十月の大会において、現行の相伝科目やお点前の確立、現在の茶の湯の礎を『不白筆記』を通じて宝曆・天明期前後にもとめるお話しを申し上げましたが、没後二百年を経て、不白とその時代はまだまだ解明されるべき課題が山積であるように思われます。

理 事 会

平成二十一年度第二回理事会は、七月十九日（日）午後二時から、池坊短期大学第二会議室で開催された。出席者は、会長・理事・幹事合わせて十八名、議題は以下の五題であった。

- 一、今年度事業計画の詳細
- 二、来年度大会の日程
- 三、会員増強
- 四、学会の目的遂行
- 五、その他

一、の事業計画では、神谷副会長が資料を読み上げて確認された後、各担当理事から補足説明が行われた。特に、来年一月三十日、三十一日に広島で開催予定の研究会の経過報告では、一日目は広島市内のオリエンタルホテルを会場として、研究発表と懇親会をする予定。上田宗岡氏に講演をお願いしており、他に発表者一名を予定しているとのこと。二日目は、上田流和風堂の見学会を予定。見学時間を一回二時間とし、二回に分けて、一つのグループを三十五名以内で回る予定。また韓国での研究会は、参加者を募集中で、二十

露地が一对かと仰って「釣鐘と桜の林等しくて」と上の句はなさったがついにその後は仰られなかったという。

以上が『不白筆記』中に書かれた要旨ですが、この如心斎の発句から三十年後に不白が書いた掛物には不白が自身で下の句を次のようにつけたとありました。

「花はあかつき雪は夕くれ」と。

名ほどの申し込みが来ているとのこと。

二、の大会の日程では、来年名古屋で開催している名古屋文化短期大学を予定しており、六月の土日で日程を調整中で、土曜日は発表と懇親会、日曜日は茶会を予定していると報告があった。

三、四の会員増強と目的遂行では、大会・例会の参加者が増えてきたので、今後、退会者を減らす工夫や、新入会員を増やしていくことが確認され、例会の内規の変更も含め、次回の理事会で検討することとなった。

五、その他の案件として、静岡例会浜松会場でお世話をしていただく岡本弘美さんが、新たに幹事に推薦され、異議無く承認された。また、会誌の残部処理、大会時のワークシヨップ、会誌編集会議についても話し合われた。

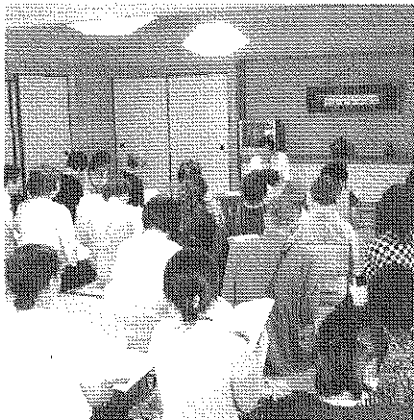
大 会

平成二十一年度大会は、六月十三日（土）、十四日（日）の二日間にわたって開催され、初日は京大会館（京都市左京区）において研究発表と総会、シンポジウムが行なわれ、百六十一名の参加があった。また二日目の見学

会には八十名の参加があり、南禅寺周辺にある白河院、清流亭、大寧軒の数寄屋普請、近代和風庭園を見て回った。



【谷会長の挨拶】



【見学会】

研究発表

十三日の研究発表では、午前二題、午後二題、以下のような梗概で、順次発表が行なわれた。

（午前の部）

「茶道役」の基礎的研究

岡 宏憲氏

近世の茶道研究はこれまで盛んに行われてきた。その切り口の一つが大名茶道研究で、古田織部に始まり、小堀遠州や片桐石州、更には井伊直弼といった、その時代の新たな茶道論を考案した大名茶人研究であった。個別研究の蓄積が多くなされる一方で、それらを繋ぐ横串の研究はまだ十分に検討の余地があると考え、その一つの視点として「茶道役」に着目した。

「茶道役」とは幕府・諸藩における茶道を現場レベルで支えていた所謂「茶坊主」を指す。時代によって呼称は異なるが、幕府では茶道頭や数寄屋頭、諸藩では御茶道、茶道と呼ばれた。その実態については実務面を支えていたと纏められ、その詳細についてはあまり検証されておらず、昨今「茶道役」に関わる研究が多くなされる中、一度「茶道役」の性格・性質について改めて検証すべく、今回

の報告では標題の通り「茶道役」の諸要素について基礎的な研究を試みたいと考える。

考察方法としては平成十九年三月に九州大学大学院の修士論文として提出した、「近世茶道役の研究」の内容を補足・訂正し、鳥取藩を中心とした全国の諸藩における「茶道役」について、藩政史料や諸家譜など一次史料を基に①出自、②身分、③職制、④職務の四点を明らかにする。

出自については、突然茶道に長けた人物が誕生したとは考えにくく、何処からか取り入れた事が予想される。江戸初期の史料残存状況は決して良くないが、肥後藩・鳥取藩の事例より、京都・大坂・堺など地域に在住した商人・浪人層から武士の身分として招き入れたことが確認される。これには双方にメリットがあり、藩側としては茶道文化を自藩に取り入れ、商人・浪人らにとつては武士の身分として雇われることが出来た。

身分は「茶坊主」と呼ばれるが武士であり、分限帳にも記載された。形態は剃髪しており、医者・儒者・鷹師などと同様に「家業」に分類され、その特殊な技能をもって俸給を得ていた。

幕府などでは初め茶道頭―茶道という職制

であったが、その後数寄屋頭―数寄屋組頭―

数寄屋坊主と細分化され呼称も変化してくる。

この現象は諸藩でも見られ、江戸中期以降は主に三つに分類され、それは平士格―徒格―坊主格という武士の身分に準じていた。

複数の藩の事例より①藩主・藩士への茶道指導、②藩内の茶事監督、③茶室・道具・茶葉の管理の大きく三つの職務が挙げられる。

特に藩内行事や藩主の行動には茶道との関わり合いが深く、その際の給仕・指導といった職務が重要であったと考えられる。

結論として「茶道役」とは幕府や諸藩の御数寄屋方に勤仕する者の総称で、主に京都・大坂・堺など地域で茶道に造詣が深かった人物が武士身分として取り込まれていき、医者・儒者・鷹師などと同じく家業に属した。時を経るに従い職制は細分化され、主に平士格―徒格―坊主格に分類され、各藩・各身分によってその呼称は異なっていた。その職務は諸藩によって若干の差異があったと考えられるが、主に①藩主・藩士への茶道指導、②藩内の茶事監督、③茶室・道具・茶葉の管理であった。

茶道における「守破離」について

―『山上宗二記』を中心に―

朴 珉廷氏

「守破離」とは「守る・破る・離れる」という意味合いで、茶道における修行の三段階を表す大事な概念とされている。特に茶道の稽古に大切に用いられている、いわゆる『利休百首』にも「規矩作法守りつくして破るとも離れるるとももとを忘るな」の歌がある。

しかし、「守破離」についての本格的な研究は今までのところ少ないように思われる。そこでこのたび「守破離」研究の一つの試みとして、「守破離」の関連では今まで殆ど取上げられたことのない『山上宗二記』の一節を考察していきたい。

「守破離」という言葉は、もと軍法用語として用いられていたとのことであるが、私が確認できたのは、幕末に稽古とは何かを説いた千葉周作の『剣法秘訣』においてであった。

「守破離」という言葉が茶書に初めて見られるのは管見に入ったところ、『茶話抄』・『不白筆記』（十八世紀中頃）である。ここに「守破離」という軍法用語が用いられた背景には、武家の者に茶道の修行の段階を説くために彼らに親しみ易い言葉を選んだのであろう。上書に、守は「下手」で守株待兔の段階といい、破は守を習い尽して破る「上手」

の段階で見風遣帆に喩えられている。最後に到達するところは守も破も離れた「名人」の「應無所住而生其心」の段階で「心術双忘、一味常願」の所であると述べ、是こそ茶道の妙道であると教えている。ここに「守破離」は初めて、深い意味合いを持った茶道の修行論として登場してきたといえよう。

『山上宗二記』には茶人の大事な心得としての「茶の湯者覚悟十体」・「又十体」の後に『論語』からの引用と、それに加えられた注がある。この部分は難解でこれまでいろいろな解釈があるが、私はこのたび倉澤行洋氏の研究を参照し、「守破離」の観点から解説を試みてみた。以下に『論語』の記述と『山上宗二記』の「守破離」に関する記述とを対応させて表を作ってみた。

山上宗二は「守破離」という言葉は用いていないが、全く「守破離」に当るような茶道の修行の段階を述べていることが分かる。これは恐らく宗二自身の極めたる茶の修行の体験から出たものであろう。そして『論語』が年を追っての「境地」を表すことに對して、『山上宗二記』はその境地に至るまでの段階の「過程」を非常に具体的に富んだ内容で述べている。ここは日本の芸道の「道」が境地

を表す「道(ど)」より、過程としての「道(みち)」をより重要視してきた伝統が象徴的に、端的にみられるところであろう。茶道とはなにか。その答えもここからえられるのではなからうか。それは、茶から心への道・その心から茶への道と言えよう。「守破離」は正にそのプロセスであろう。事サとともに精神性を求めるものにとって「守破離」は「導きの星」ではなからうか。

井伊直弼の茶道観

―茶の湯の心のはたらき―

濱崎要子

井伊直弼は、茶の湯の心を百丈懷海禅師の作務精神に求め、行持としての茶の湯を実践することによって、信仰としての茶の湯を日常生活上に現成する。

一 もてなしの心

直弼のもてなしの心は、志厚さと表現され、千利休の茶の湯の心を継承する。信仰としての茶の湯は新約聖書で語られるもてなしの心に通じ、奔走し尽くすもてなしの心のはたらきが茶の湯を侘びの行道とする。

二 「一座建立」の茶会から主客応答の茶会へ
直弼は「一座建立」の茶会から、亭主が正

客ただ一人と茶の境涯を問答商量する主客応答の茶会へと変化させ、茶の湯を「賓主歴然」、「賓主互換」を経て「無賓主会」へと深化させる。

三 無常を感じる心

茶室の花や炭の流れに無常を感じ、この瞬間に縁起としての仏心を観る。無常を観心することが空観の茶の湯の心のはたらきである。

四 「一期一会」の心のはたらき

流動性と恒常性が交叉する瞬間の心のはたらきが、直弼の「一期一会」である。この心のはたらきを説く他の考え方を参考にして、直弼が求めた茶の湯における永遠の心のはたらきを考える。

五 「独坐観念」の心のはたらき

客が帰った後、亭主は一人炉前に座り沈黙と対峙して観心の修行を実践する。直弼にとって、自己の心を内省し心を観察する身に付けた心のはたらきこそが茶の湯を日常生活の指針にする目的である。

六 新たな倫理観の形成

茶の湯を通して常に恒常なるものを求める生き方は、社会生活において公共性への感性となり、新たな倫理観を形成してゆく。

(外地)に居住した人々の「茶」「花」の受容を考え、そこから日本人にとって「茶」「花」の存在とは何か、ということを考える端緒としたい。

茶室の床の間の起源に関する一考察

岩崎正弥氏

標題については、既に先学諸賢の研究が尽くされたところで恐縮ではあるが、私は「仏壇起源説」の真意を明らかにし、さらに「ゆか」と「とこ」に着目し、床の間の意味を高めようとするものである。

太田博太郎は『床の間』の中で「押板仏壇起原説」という項を建て、有職故実家伊勢貞丈が「床も、佛家にての佛壇なり。本尊を置く所なり。」と、また国学者沢田名垂が「床間は佛壇の略なりという説あり、さもあるべし」と記したことを指摘し、その後の「床の間」研究の、批評の基点とみなした。

終戦前後まず藤原義一が「トコの起源を佛壇にありとするのは、いかなるものであるか。旧来の諸説は何れも明証を欠き、推定の域を出なかつた感が多い。」との問題提起をし、絵巻や『君台観左右帳記』等と、建築の遺構の分析を照合して、「床なるものは上段

(午後の部)

総会

総会は、影山純夫副会長の司会により、午後一時から始まった。最初に、谷端昭夫理事が議長に選出され、その後は谷端議長により議事が進行された。議題はまず、平成二十年度事業報告が高橋忠彦副会長から、また決算報告が神谷昇司副会長から報告され、さらにこれに対する監査報告が神谷副会長の代読によって報告され、とくに異論なく了承された。次に平成二十一年度の事業案が高橋副会長から、また予算案が神谷副会長から提案され、これも了承された。

研究発表

近代日本の植民地と茶の湯・いけばな

小林善帆氏

これまで近代の茶の湯・いけばなについては、女学校・高等女学校(以下、女学校)における受容を中心に検討し、以下のように考えてきた。

女学校で茶の湯(以下、「茶」)・いけばな(以下、「花」)は、必ずしも取り入れられるということではなかった。「茶」「花」は女学校で取り入れられることがあり、それ

は家庭でのしつけとの共有という形や、主に情操教育、趣味娯楽、修養として学科目外に志望者に、いわば女学校に付随する形で取り入れられる程度であった。「茶」「花」はむしろ女学校卒業後の花嫁修業や女性の職業として取り入れられ、女性のなすべきものとしての位置を確立した。さらにこれらの取り入れの理念として、修養ということが考えられる。

またキリスト教主義の女学校では、「茶」「花」の取り入れは、日本の体制に迎合する姿勢を強調する一つの方法としての側面があり、一般的には載せられることがなかった卒業アルバム、特に戦時期その写真が残されるなどしている。

(以上詳細は、拙著『「花」の成立と展開』和泉書院 二〇〇七年を参照されたい)

一方、植民地台湾において「茶」「花」はとても親しまれ、異郷において日本人としてのアイデンティティを確認するためのものでもあった。(『民族藝術』25号 民族藝術学会編 二〇〇九年ほか)

本発表は、これらの研究成果を踏まえ、植民地台湾・朝鮮・満州・南洋群島の、女学校における「茶」「花」の受容とともに植民地

の間のことであつたらしく推定される。「など、今日の研究の方向性を示唆した。これに続いて堀口捨己によって茶書などの分析から、「押板から床の間への変遷が、茶人による茶室において創意された「床の間」によってなされた事」などが証明され、太田博太郎が、「床の間は茶室において、上段と押板が縮小され、合体してできたものであった。」との定説を確立した。中村昌生はさらにそれぞれ茶匠の茶風に迫り、「床の間が貴人の座であり、観賞の場である、すなわち尊貴の座であるゆえに、一座の主客同座の秩序が形成された。」と看破した。

ここに至り、私は、明証を欠くと論難された「仏壇起源説」の論は、「茶禅一味」たるべき茶の湯の「床の間」ならばこそ、尊貴なる空間であり押板の場であるがゆえに仏壇の名を挙げつつ、その起源は押板に求めている点で、それらの主旨は大いに再評価されるべきであると思うものである。

また、太田静六は、押板式床ノ間の源流は、中国の壁面軸装の前机形式によるものとし、床の原義の漢字「牀」が人の坐臥する所・家具を指すことと合せて、「中国『牀』源流説」を唱えている。

さて、前久夫が、野地脩左の説「語源的に
いえば、ユカはイカ（齋所＝神聖な場所）の
転化したものと考えられる」を取り上げ、「ト
コノマの起源をイカ（齋所）に求めては」と
提起したことについて、私は「床（ゆか）」
が齋所であるならば、それは上古・中古にお
いては檜の板敷であったことに着目したい。
檜は素戔嗚尊より「瑞宮をつくる材にすべし」
と賜りしより、神殿・仏殿・寝殿をつややか
に輝かせてきた。その床（ゆか）の上に、人々
は位に応じた畳の座具を床（とこ）として置
き、そこに坐臥した。人々が香を脱いで板敷
の床（ゆか）に上がったのも、直接には触れ
ずに床（とこ）を介したのも、板敷の床（ゆ
か）に齋所（＝神聖な場所）を感じていた証
拠ではないだろうか。

その後、板敷の床（ゆか＝板）に床（とこ）
＝畳が敷き詰められてゆく中で、仏画の前
に荘嚴のため真塗を施された「前机」が「板」
となって造り付けられたのが「押板」であっ
た。そして床（ゆか）のもつ齋所の靈力は上
段の「框」も継承され、茶室において、貴人
を迎え入れる上段＝床（とこ）の役割ととも
に凝縮し、尊貴なる空間として創造されたの
が框式畳床の「床の間」であったと。

を三期、すなわち(一)煎茶法の時代(唐代に完
成)、(二)点茶法の時代(宋代に完成)、(三)泡
茶法の時代(明代に完成)に分けて詳細に述
べられた。(一)では、煎茶の淵源としての『茶
経』の煎茶法、その沸かし方の法、水論(水
質の上中下)、水のランキングを著わした『煎
茶水記』などについて紹介された。(二)では、
『茶録』『大観茶論』での点茶法がまず述べ
られ、その「十六湯品」の記述のように、湯
の煮え加減、注ぎ方、湯瓶の材質、燃料など
の違いに注目あるものの、水自体の記述は少
なく、宋代の名水が、概ねそれ以前の『煎茶
水記』の名水を踏襲したものであったことを
示された。また(三)では、明代における泡茶の
完成に伴って茶文化も発展し、全国的な名水
の網羅、『煮泉小品』『水品』を主とする水
論の精緻化などが見られ、それはおよそ身代
にも受け継がれた。

「お茶に合う水の科学」

吉永清志氏

お茶にとっての水、という視点に立って実
験された結果から、おもに三つの点について
報告をされた。まず第一点目として、「おい
しい水」が科学的に見てどういう水を指すの
かを、カルシウムやマグネシウムなどによ
る硬度(茶の旨味に係ることもされる)。

茶室の床の間の尊貴なる空間の源流は、仏
壇でありながらも、なお語り尽くせない聖な
るものの香りが残るとするならば、それは大
和の国の「神殿」の床(ゆか＝板)と床(と
こ＝畳)の瑞々しい姿にまで遡ることができ
るのではないかと存じ、私はここに「床の間
神殿起源論」を提起するものである。

シンポジウム

テーマ「お茶と水」

堀内國彦氏

高橋忠彦氏

吉永清志氏

(司会) 小泊重洋氏

最初に小泊氏から趣旨説明がなされ、この
シンポジウムではお茶の味に大きな影響を及
ぼす「水」に焦点を絞り、堀内氏から日本の
名水、高橋氏から中国の名水、吉永氏からは、
お茶に合う水とは科学的にどういうことを指
すのか、というそれぞれの視点からのお話を
伺い、水を複合的に捉えようということであっ
た。その後三氏が三十分位ずつそれぞれ講演
され、最後に質疑応答と小泊氏のまとめがあっ
てシンポジウムを終えた。このシンポジウム
の詳細については、いずれ『茶の湯文化学』

炭酸(酸味)、陰イオン、酸素(旨味)、ペー
ハー、塩素などとの関係から述べられた。第
二点目は、お茶と水との関係について、硬
水で立てたお茶でも味の点数は高いこと、た
だし煎茶では圧倒的に軟水が合うこと、また
茶種の違いによる水の適性は、煎茶・紅茶で
その爽快感を楽しむ時は低硬度が合い、玉露
や抹茶で旨味を楽しむ場合は、高硬度つても
合うとされた。三点目は釜で沸かした湯の優
位性についてで、ゆっくり沸く構造のため、
炭酸が多少減って抹茶の色を鮮やかにするこ
と、沸騰前の一時間ほどは硬度が上がること
により苦渋味が軽減し、その分旨味が出るこ
と、などを明らかにされた。

これらののち、質問の時間がとられ、煎茶
と抹茶それぞれに適した水、名水のお茶との
適合性、名水醒ヶ井としての水の特徴、中国
の名水の安全性、おいしいお茶を出す際の注
意点などに関し質問があった。

に掲載されるので、ここでは三氏の講演の概
要を、速報としてごく簡単に紹介したい。

「日本の名水とお茶」

堀内國彦氏

お茶にとっての水ということに特化して、
いろいろな日本の名水を紹介された。前半で
は、名水が生まれる要因を説明され、たとえ
ば、水が落葉や木の根から炭酸ガスを吸収し
て名水となる場合や、宮水のように花崗岩層
を通った水、醒ヶ井の水のように、深い谷に
石がたくさん埋まり、そこに水が溜まって溢
れ出してくる場合など、岩石や樹木と名水と
の関係が述べられた。また後半では、醒ヶ井
をはじめ京都のいろいろな名水、たとえば柳
の水、梨木神社の井戸水、千家台所の井戸水、
宇治橋三ノ間の水などを、茶書の名水の記述
も交えながら紹介された。最後に、湯を沸か
すことに関して、雲竜釜の利点、温度の違い
による抽出成分の変化、抽出時間の違いによ
る成分の変化などを説明されて話を閉じられ
た。

「中国の名水とお茶」

高橋忠彦氏

最初に「中国における水・泉・井」と題し
て、この三字がもっていた各イメージを説明
され、加えて「江」「河」のイメージについ
ても述べられた。次に「中国の茶文化と水」



【シンポジウム】

例会のご案内

東京例会(会場 五島美術館講堂 午後二時

日時 十一月二十八日(土)

「大東急記念文庫の名品から

―創立六十周年展にちなんで―

村木敬子氏

「女性の茶の湯―江戸時代を中心に―」

谷村玲子氏

日時 二月二十七日(土)

〔未定〕 中村修也氏
〔未定〕 福島洋子氏

北陸例会
日時 三月二十七日(土)
見学会 未定
勉強会 未定

文学館慶雲庵茶室 午前十時)

「茶の湯関係文献を読み所感の発表」
「利休にたずねよ」 山本兼一著

発表者 永吉溪滋氏

静岡例会

日時 十月二十四日(土) (会場 掛川市・

美感ホール午後一時～四時半)

(第二十四回国民文化祭応援事業

茶学の会と共催)

主題 「日本人にとって茶の湯とは何か」

講演とパネルディスカッション

「茶の湯とは」 倉澤行洋氏

「茶道の社会的考察」 大屋幸恵氏

「茶の湯の普遍と特殊」

H. S. ヘンネマン氏

「禅茶録と茶の湯」 吉野白雲氏

司会 小泊重洋氏

参加申し込みは十月十三日まで、

(ファクス0537-24-4864担当:小泊)

東海例会 (会場 名古屋文化短期大学アセン

ブリ・ホール 午後六時)

日時 十一月二十七日(金)

「天目の由来―中峰明本関係と

幻住庵清規―」 岩田澄子氏

「美濃の懷石道具―膳碗との比較

から―」(仮題) 神崎かず子氏

近畿例会

日時 十月三日(土) (会場 伴市(素心庵)

鳥丸六角西入ル南側

電話075-221-3336

午後二時)

「『南方録』「覚書」集雲庵物語に関

する一考察」(仮題) 杉谷朱美氏

「久留米藩御庭焼 柳原焼について」

中村美穂氏

日時 十二月十九日(土) (会場池坊短期大

学第一会議室 午後二時)

「茶文化のデパート 竹川竹斎」

岩田澄子氏

「近世前期武家の茶の湯における旗本

茶人について」(仮題) 八尾嘉男氏

「茶の湯における「好み」についての

一考察」 岸本真理子氏

高知例会

日時 十二月十三日(日) (会場 高知県立

「わびの研究」 江守奈比古著

発表者 小松 聡氏

「私が死ぬと茶は廃れる」 三鬼英介著

発表者 今井浩嗣氏

茶事 主席 竹林美佳・長野すが・中村明美・

西岡ひとみ(会場 同所 正午

～午後四時)

会費 五千円 (参加希望者は

予め連絡をして下さい)

日時 二月七日(日) (会場 高知県立文学

館慶雲庵茶室 午前十時)

「平面図で見る茶室構造」

このほか、一般の方々が茶の湯に親し

んでもらうための茶席を、毎週日曜日

を主体(十時～十六時)に同所で設け

ます。

後記

朴珉廷氏の大会発表につきまして、紙面の

都合上、表の掲載ができませんでした。誠に

申し訳ございませんでした。